

日本ど真ん中流星会議を終えて

小 林 美 樹

平成31年1月1日、いただいた年賀状をパラパラとみていたら、一枚に目が釘付けとなった。長沢先生からのものである。そこには、年會を担当する私へのねぎらいと共に、出席したとしたためてられていた。いや、ちょっと待って、先生、流星會議よりもオリンピックでしょ！その時、私はそう思った。

平成29年10月1日、長沢先生は3度目のガン宣告を受けたと淡々と話された。年齢的なこともあり、手術も抗がん剤治療もしないとも。2回目のオリンピックをどうしてもみたいと話され、もう、流星物理セミナーで話す事も、参加することも最後ですからとおっしゃった。

その長沢先生から「出席」というお言葉をいただくとは夢にも思っていなかった。と同時に頼りない者が担当するので随分とご心配されておられるのではと自分自身に発破をかけた。この段階では大きな枠組みを決めただけで実は何一つ行動をおこしてはいなかったのだ。

発表申込も参加も多く、うれしい悲鳴を上げ、名簿の整理、予稿集の整理等の事務に追われつつ、いつも心の片隅には長沢先生の事がありました。先生から出席の旨の連絡があれば、出来る限りの先生シフトをご用意する、少ないスタッフでどこまで出来るのか、ずっと考えていました。

令和元年7月7日流星物理セミナーに参加した。セミナーが始まってしばらくして人が座る気配がして振り向くとそこには長沢先生が着席される所でした。終了後は速効で先生を追いかけると、「貴方が仕切る流星會議なのでね」とおっしゃられたお声に力がなく、名古屋で待っていますとはどうしても言えず、ご心配をおかけして申し訳ありません、予稿も集録をお送りしますと頭を下げた私に「楽しみに待っていますから」と静かに帰途につかれました。

予稿集をお送りすると丁寧にお葉書を下さり、お守りとして會議の間中持ち歩いていました。今もずっと持ち歩いてます。集録、実は割と早い段階で特にホームページ用は出来上がっており、印刷してお送りする予定でした。それが出来なかったのは編集後記の言葉をさがしていたから。気遣いなどしないでそもそも編集後記など入れずにお送りしておけば、今、こんなに後悔することも無いのに。

頼りない者が担当したため、皆様には随分とご心配を頂き、また、會議当日は色々とお助け下さいまして感謝申し上げます。大切な、大切な思い出をありがとうございました。